

論文の要旨

ふりがな 氏名	しま かつや 島 克也
論文題目	Robert Heinlein の青少年向け SF 小説における白人性 ——多文化主義帝国の終焉——
<p>アイザック・アシモフ(Isaac Asimov)、アーサー・C・クラーク(Arthur C. Clarke)と並んで 20 世紀を代表する SF 作家であるロバート・A・ハインライン (Robert A. Heinlein, 1907-88) は、これまでの批評において右翼的、左翼的、軍国主義的、反戦主義的、国家主義的、個人主義的など、相反するさまざまな呼称を与えられてきた。たとえば、ハインラインの著作のうち、SF 作品に贈られる最高の賞の一つであるヒューゴー賞(Hugo Award)を受賞し、彼の代表作とみなされている長編小説『宇宙の戦士』(<i>Starship Troopers</i>, 1959)は、そこで展開される政治的言説がファシズムを称揚しているとして物議を醸し出したが、その次に出版され、同じくヒューゴー賞を受賞した『異星の客』(<i>Stranger in a Strange Land</i>, 1961)は、ヒッピー達の神秘主義的趣向に多大な影響を与えた聖典とみなされ、ハインラインはカウンターカルチャーのアイドルとして祭り上げられたのである。それゆえ従来のハインライン研究は、作品毎に異なる政治的言論を生み出すハインラインの思想基盤を見出すことができず、個別の作品分析を時系列順に列挙するものか、テーマを共有する小説群だけを抽出して部分的に作家像を論じるものにとどまっていた。</p> <p>それに対して本論は、『宇宙の戦士』や『異星の客』などの、相反する政治的言論が展開されているハインラインの代表作のみを分析するのではなく、それらの代表作が出版される直前に執筆・出版された青少年向け小説群を詳細に分析することによって、ハインラインの思想基盤を見出し、その包括的な作家像を構築することを目的とする。ハインラインによって 1947 年から 1958 年の間に執筆された青少年向け小説群は、彼の代表作に比べると文学的価値が低い作品であると多くの批評家にみなされ、これまでほとんど批評の対象になることはなく、ハインライン自身にとっても、大手出版社から単行本の小説を出版することによって生活レベルを向上させたいという経済的な動機によって生み出されたものだった。しかし、彼にとって初めてとなる大手出版社とのこの協業において、ハインラインは、アメリカ社会のタブーを規定し、伝統的なモラルを維持しようとする人々からの絶え間ない干渉を受けており、この時の経験がその後の代表作のテーマ選択や、作品内で展開される政治的言説に決定的な影響を与えている。それゆえ、青少年向け小説群を執筆した 12 年間に、彼の文学エージェントから受け取った手紙で述べられている修正要求や、その返信におけるハインラインの反応を参照しつつ個々の作品を分析すると、後の代表作において表明されるさまざまな政治的言説の萌芽を見出すことができるのである。</p> <p>ハインラインの青少年向け小説に幾度も修正を要求したのは、彼を担当したアリス・ダグリーシュ(Alice Dalgliesh)という名の編集者であるが、その修正基準は明文化されたものではなく、その編集者が独自に設定したものでもない。それは、当時のアメリカ社会において「青少年読者が読むにふさわしい教養的なもの」という曖昧な基準であるため、ハインラインはその対応に苦慮していた。その基準を決定するのは、アメリカ社会の伝統的な道徳・倫理意識を維持する立場にあることを自認しており、同時に他者からもその資格保有者であることを暗黙のうちに認められている人々であった。彼らが共有しているこの曖昧な基準と価値観は、昨今のホワイトネス・スタディーズにおいて「白人性」と呼ばれている、新たな人種区分における白人の資質をその根拠としている。</p> <p>植民地時代から第二次世界大戦前までのアメリカでは、肉体的な差異を根拠とする可視的な人種区分が社会システムに組み込まれていたが、多文化社会を標榜する戦後のアメリ</p>	

カでは、白人が本来保持すべき教養・社会的地位・愛国心・キリスト教に基づく伝統的
社会慣習を肯定する態度などの、後天的に獲得可能な資質を根拠とする不可視の人種区
分が、政治・経済・文化に大きな影響を与えるようになった。そのようなアメリカ社会に
おいて、青少年向け小説は、白人性を保持する人々によって運営される国家の維持・発展
に貢献する健全な人材に与えられる教材という側面を持っているのである。ハインライン
がダルグリーシュによる修正要求に苛立ちを感じ続けたのは、ドイツ系移民とアイル
ランド系移民の子孫であり、従来の人種区分では白人に区分される外見の持ち主であ
るにもかかわらず、戦後のアメリカ社会を統制する原理である白人性に欺瞞を感じて
いたからと解釈することが可能である。

ハインラインによる12作の青少年向け小説は、「帝国からの植民地の独立」をテーマ
とするもの、「新たなヒーロー像の模索」をテーマとするもの、「出版当時のアメリカ
を取り巻く国際社会情勢」をテーマとするものに分類することができるが、これらの
小説を白人性の観点から俯瞰すると、白人性に対するハインラインの姿勢が明確に
なる。「帝国からの植民地の独立」をテーマとする小説は、自由と独立を描く物語
であると同時に、従来の可視的な人種区分が終焉を迎え、多文化社会における
特権を意味する白人性によって構築される不可視の人種区分が発展してゆく様
子を窺わせている。また、「新たなヒーロー像の模索」をテーマとする小説では、
19世紀末におけるフロンティア消滅によって、従来の開拓者型のアメリ
カン・ヒーローが存続不可能となった後に、新たなヒーロー像を模索する姿勢
が明らかである一方で、白人性を保持する人々によって運営される社会は、
社会の運営に携わるヒーローを必要とせず、従順で健康な国民のみを必要と
していることが描かれている。そして「出版当時のアメリカを取り巻く国際
社会情勢」をテーマとする小説は、第二次世界大戦後に西側諸国を率いる盟
主としてのアメリカの国家的責任を、青少年読者に伝える物語であると同
時に、多文化主義型の社会は、民族・宗教・文化の併存を原則としつつも、
実際には特定の民族・宗教・文化を中心に据えたランキング社会であり、
後天的資質であるはずの白人性を獲得する機会が与えられないことを訴える
物語でもある。このように、ハインラインの青少年向け小説群では、多文化
の共存を標榜しつつも、白人性を保持する人々によって権益が独占される
社会の不健全性が描かれ、ハインラインの作品にさまざまな修正を要求する
白人性そのものが、アメリカ社会の内部に広がる「病」であることが示さ
れているのである。

青少年向け小説の執筆を終えた後に出版された『宇宙の戦士』と『異星の客』
では、相反する政治的言説が展開されているが、白人性という観点から言
えば、両者は共に、白人性を保持する人々によって管理運営される社会が
崩壊する過程を描いている。すなわち、前者が描く社会では軍属経験の有
無によって社会的地位が決定され、白人性が支配的力を喪失している。
一方後者では、異星人がもたらそうとする新たな社会の到来を阻止しよう
と、従来の既得権益である白人性を保持する人々が暗躍する姿に、白人
性にに基づくアメリカの社会制度や慣習の崩壊が窺える。

大手出版社がハインラインに青少年向けSF小説の執筆を依頼したのは、
当時のアメリカの青少年達の間で大きな流行となっていたコミックブ
ックが、青少年達に与えた「悪影響」を浄化するためであった。コミック
ブックの多くは、マイノリティをはじめとする白人性を保持しない人々
によって、従来の出版物とは異なる経路で流通していたため、白人
性を保持する人々によって形成される従来の出版業界は、コミックブ
ックを敵視し、社会から排除しようとしたのである。コミックブック
に対する法的規制が強化され、1956年頃にはコミックブック業界は
崩壊したが、ダルグリーシュによって修正が施されたハインラインの
青少年向け小説は、表面的には「上品」かつ「健全」なものであり、
社会を担う人材の育成に貢献する一方で、第二次世界大戦後のアメリ
カ社会を自らの利益追求のために改変してゆく、白人性を保持する
人々の危険性を指摘するという、新たな「悪影響」を与えて、アメリ
カの多民族主義に貢献してゆくのである。